

『カラー図説 グリムへの扉』

裕村 裕子

二〇一二年は、『グリム童話』Kinder- und Hausmärchen が刊行されて二〇〇年の節目の年であり、ドイツのみならず、日本でも様々なイベントが行われた。そのうち、東洋大学創立一二五周年記念事業の一環として国際シンポジウム「グリム童話2000年のあゆみ 日本とドイツの架け橋として」が開かれた。本書は、そのときの成果報告をベースに、さらに三名の執筆者（田中、西口、高橋）を追加してグリム研究の入門書として出版されたものである。

執筆者と論題は以下のとおりである。

序章

「グリムへの誘い」 大野寿子

第I章 グリム兄弟の人物像をたどる
「グリム兄弟と故郷ヘッセンとの相反的な関わり」 ハルム・ベア・ツィンマーマン
「子どもと家庭」に込められたグリム兄弟のメルヒェン観」 田口武史

第II章 グリム童話と挿絵の歴史をたどる
「『子どもと家庭のメルヒェン集』2000年 グリム童話の挿絵と影響の歴史」 ベルンハルト・ラウアー
「挿絵からみたグリム童話 日本における西洋の影響」 西口拓子

「19世紀西洋視覚とジャポニズム 挿絵の世界は切られてなんぼ」 高橋吉文

第三章 グリム童話研究の歩みをたどる

「メルヒェンと伝説、その驚きの世界観 変身物語を中心に」 溝井裕一

「明治期におけるグリム童話の翻訳と受容 初期の英語訳からの重訳を中心に」 野口芳子

「グリム童話と比較民話学」 竹原威滋

第IV章 グリム兄弟博物館の歴史をたどる
「カッセル・グリム兄弟博物館 一九五九―二〇一四」 ベルンハルト・ラウアー
「グリム兄弟博物館ポスターギャラリー」

おわりに ―終章にかえて 大野寿子

その他「はみだしギャラリー」として、シウトゥーベンラウホ、デュラック、クレイン、ニールセンらが描いたグリムの挿絵を楽しむページや、「参考資料」として、グリム童話を学ぶ人のための文献目録（竹原威滋作成）、七版や小さい版の目次等が収められている。さらにグリム童話の

挿絵やグリム関係の図版が、カラー画像で二五〇点以上取められており読者を惹きつけてやまない。

以下、各論の概要を紹介する。

序章で大野は、観光や二次創作を含めた現代のグリムの受容状況を明らかにしつつ、グリム童話七版（決定稿）までの改編作のプロセス、「marchen」とは何か、一九世紀初頭の社会変化のなかで「子ども」と「家庭」は何を意味していたか、グリム兄弟の生涯についてまとめている。この章だけでも、グリム童話の入門書として価値があるだろう。また、「はじめに」で、表紙の絵（マリアの子）に触れ、子どもの成長の一過程を象徴的に描いた物語と紹介しているところが興味深い。なぜなら、昔話から人間の発達や深層心理を読み取るのは、二〇世紀の心理学的な昔話研究の姿勢であるが、本書では、この昔話から子ども

の発達を読み取る姿勢がすでに「前提」になっているからである。グリム童話及びグリム研究が、新しい研究成果を貪欲に取り

入れ、深化し広がりをもせていることが、この序章だけで読者に響いてくるのである。

第一章では、グリム兄弟の人となり、文献学的手法で明らかにされる。

ツインーマンによれば、ヤーコプ・グリムは都会的な高層建築を好んでいたという。しばしば故郷に対する切なる思いを書き記しているグリム兄弟だが、彼らにとつて故郷とは郷愁誘われる田舎の田園風景ではなく、人間性の規範を成せる空間を指すのである。

いっぽう田口は、近代化によって変質を余儀なくされつつある当時の家庭にあつて、語りの伝統を守ろうとグリム兄弟は昔話集を編んだのだと指摘する。それ故に、テキストは単なる聞き書きの機械的な文字化ではなく、語り直されることを目的とした文章であつたと述べる。

第二章では、グリム童話に付けられた豊富な挿絵の数々が美しいカラー図版で収められている。しかし、グリム兄弟が直接手がけた『グリム童話』そのものに付けられ

た挿絵は、末弟ルートヴィヒ・エミール・グリムによつて描かれた、語り手フイーマン夫人の肖像画（二巻初版より）と「兄と妹」の挿絵（二版より）の合計二葉だけであつた。海外で翻訳されるにあたって挿絵が付けられと、グリム兄弟も「小さい版」出版時には挿絵を増やしたという。

ラウアーは幅広く挿絵の歴史を示す。メルヒェンは具体的な場所や時代に限定されない。そのため、各国で画家が自身の想定する「過去」と結びつけた挿絵を描くようになった。二〇世紀になるとユーゲントシュティールの影響を受けた新しい挿絵が描かれる。ここでは、テキストの現実とメルヒェンの象徴性が融合されることとなった。最も成功した挿絵画家オットー・ウベローデは、グリム童話をヘッセンの風景と結びつけて描いた。このため、今でもヘッセンの風景からグリムの物語を読み取るこ

とができるのである。

西口は、グリムの挿絵が日本でどのように発展を遂げてきたのかについて詳細に記述する。当初、日本の挿絵画家たちは西洋

の挿絵を大胆に日本風にアレンジしつつ、西洋画の手法を取り入れようと試みていたが、日本が西洋化されていくなかで、次第に挿絵も日本風な特徴のみられる西洋画へと変わっていったのである。

さらに高橋は、西洋画がジャポニズムを発見することで、平面性という新たな美意識を獲得し、グリムの挿絵のみならず、絵本や絵画に革新をもたらしたことを鮮やかに解き明かす。一八世紀に日本が取り入れた西洋画の遠近法が、日本にあつて浮世絵

の二次元的平面性を生み出し、さらに浮世絵が西洋に渡ることによって、抽象的絵画へと発展していったのである。高橋はあくまで絵画の問題を扱っているが、グリム童話が各地に伝えられていくうちに、その土地にあった形へ自然と変容していくさま、グリムによって非写実的文学（＝口承文芸のスタイル）の美が示されたときの衝撃等とも、呼応するようにも思えてくるから不思議である。

第三章では、グリム童話研究の歩みを、特にテキストの分野から説明する。溝井は

メルヒェンと伝説の定義を明らかにしたあと、「変身譚」を鍵に、両者の語ろうとするものの違いを読者に示す。つまりメルヒェンは、各時代の要素をおおらかに取り入れつつ、古い世界観や自然観を内包する文学であり、それに対して伝説はむしろ、語られた時代の世界観を色濃く反映していると考えられるのである。グリム『ドイツ伝説集』やグレッツェ『プロイセン国の伝説』の事例が散りばめられており、読み物としても面白い。

日本へもたらされたグリム童話は、初めドイツ語からの直訳ではなく、英訳からの重訳であった。野口は、最初の邦訳本『西洋古事神仙叢書』が、ヘンリー・H・B・

ポールの *Grimm's Fairy Tales* (1868) からの訳出であることを突き止め、原書から英訳、英訳から邦訳の間に、何がどのように変更されたのかを明らかにした。その結果、当時のイギリスの社会的制約や好みのために、「神、悪魔、聖者など宗教上の名称を避ける」「性的な表現を避ける」「王家や父親に対する不適切な表現が排除され

ている」「暴力や殺人などの残酷な表現を避ける」「性別役割分担に基づいた男性像と女性像の創出」といったヴィクトリア朝のイギリスの価値観が付加されたテキストが「グリム童話」として、まず日本人の目に触れたことを明らかにした。昔の日本語訳では、忠義・嫁姑の葛藤といった日本的な文脈が付け加えられているものの、多くはポールの文章に忠実に訳そうと試みられている。つまり、最初の邦訳文グリム童話で原典と異なる部分が散見されるのは、そもそも翻訳原本に用いたテキストが原典と異なっていたからである。日本人は、グリム童話を通して、ビクトリア朝の価値観を取り入れたのである。

大野は原典から訳すことの大切さを説いている。実は、英語圏の児童文学（不思議の国のアリスなど）であっても、パロディや抄訳をそれと知らず邦訳している例はたくさんあるのだが、どの作品をもとに翻訳を行ったのかを突き止めるのは困難なのが実情である。グリム童話のみならず、明治・大正期の翻訳文学について、さらに研

究が深められなければならない。

竹原は、グリムが童話集に付けた注釈から、昔話の国際話型カタログが成立した歴史を示し、そのカタログによる研究成果の例として東西のシンデレラ譚の比較を示している。「おわりに」で竹原の述べる「民話を通してその民族の心が見える。民話・昔話は、世界の人々の心を繋ぐことができる。民話に親しむことは、国際理解、ひいては世界平和にもつながるのである」というメッセージは、竹原の思いであるとともに、グリムからのメッセージでもあり、さらには昔話研究に携わろうとする者すべての気持ちを代弁する言葉でもあろう。

第IV章では、カッセルにあるグリム兄弟博物館の歴史が示される。(なお、ドイツにはグリムゆかりの博物館が二つある。ひとつは、兄弟が幼少期を過ごしたシュタインハウ、もうひとつが兄弟が昔話の聞き取りを行っていた頃に暮らしていたカッセルである)グリム兄弟協会の会長カール・フェテルレが、博物館開設を目指して設立表明を配布したのは、一九五八年。まだ第

二次世界大戦の傷跡が深く残っていた頃であった。グリム兄弟の末妹ロッテの曾孫ノラ・ハッセンブフルークによって、グリム兄弟の遺品が寄贈されることが決まり、またデーネケによる粘り強い説得のおかげで、一九五九年十二月、設立に至る。デーネケが初代館長を務めた頃、三〇〇点に近い資料が収集された。また、一九六三年から研究双書『グリム兄弟思想』を刊行し、グリム兄弟研究のための国際的な拠点としての地位を獲得した。続くヘニング館長時代、バレ・ヴェーのかんりの面積をもちいて「グリム兄弟の生涯と業績」という常設展を新設した。ここでは、グリム兄弟が暮らしていた部屋が再現されている。グリム兄弟生誕二〇〇年の折には、様々な企画の中心的な役割も担った。一九八九年ラウアーが館長に就任すると、博物館のコレクションは一〇万点を越すまでに増えた。さらに一九九一年、博物館内にグリム兄弟協会出版局が併設され、活発な出版活動を行っている。グリム童話出版二〇〇周年にあたって国際的な展示企画に協力した一

方、子どもたちに向けたストーリーリーティングや遊びの場の提供も行った。

このようにグリム研究にとって欠かせない存在であるグリム兄弟博物館は、二〇一四年末に閉館した。ラウアーの文章は、博物館の事業を「適切かつ新たな方法で継続していく」という決意で締められている。大変ショッキングな記事であるが、実はこの本書出版から約四ヶ月後の二〇一五年九月、博物館はグリム・ヴェルト(グリムの世界)という名前でリニューアル・オープンしている。収集コレクションに対して、博物館が手狭になったために、市は以前から移転を検討していたのである。

「おわりに」で、大野はこの本で実現しなかったことを述べる。つまり、グリム童話に対する様々なアプローチの方法を示すことによって、グリム童話を「変容するもの」として定義付けようというのだ。そして、グリム童話の研究を含む、もっと広範な「グリム文献学」を目指そうと提案するのである。ここで読者は、再び表紙に描

かれていた美しい「マリアの子」の挿絵を思い出すだろう。グリム童話の楽しい物語に遊んでたはずの子どもは、次々に扉を開けて、奥深いグリム研究を夢中で見てしまった。さて、残るは「決して開けてはいけない」と言われた最後の扉のみ。開けようか、開けまいか。

さて、これらの充実した論考を読み進めながら、ふと疑問に思うことがある。この本を読むのはいったい誰であろうか。入門書と銘打たれ、美しい図版に彩られているものの、この本一冊から単身グリム研究に分け入るのは難しそうである。ある程度、グリムについて知り、研究を深めようとする人には、自分の関心がどこに向いているのか、近接領域ではどのような研究が行われているのか、あるいは研究以外の場所でグリム童話がどのように受容されているのかを知るためには、これ以上うってつけの本はない。帯に書かれたとおり、まさしく「決定版ガイドブック」と言えよう。あるいは。今から数十年後百年後

に、グリムとグリム童話の研究が、各時代によってどのような研究を呼び覚まし、どのような活動を呼び起こしてきたのか、その足跡をたどるために活用される日が来るかもしれない。

『グリムへの扉』から、さらにグリムの研究は深まり、またいずれ新たな扉が開かれるであろう。その予感を内包しているところに、この本の他にない魅力があると思われる。

二〇一五年五月 勉誠出版刊

本体二四〇〇円

(まつむら・ゆうこ／聖徳大学)